

バイソンを取り戻そう

かつて北米全域を自由に歩き回っていた数千万頭もの野生のバイソンは、絶滅寸前まで狩り尽くされてしまいました。現在、アースウォッチはアメリカ先住民であるブラックフット族と協力し、このアメリカの象徴とも言える動物種を自然に戻す予備調査に協力しています。

—アリックス・モリス—

失われた自然の力

ナルシス・ブラッドは、立ち上がるとドアを塞いでしまうくらい大きな男でした。多くの人々から尊敬されるリーダーで、カナダ、アルバータ州南部の先住民、カイナイ族の一員であるナルキッセは、ブラッド族やブラックフット連合のメンバーとしても知られていました。ナルシスは、私たちを導く絆の力を信じていました。「相手の出自や交友関係に耳を傾け、敬意を払いさえすれば、あたかも夜空の星々のように、すべてが動きを合わせ、これまでと全く同じように働くものです」と彼は語りました。

ナルシスとクリスチナ・アイゼンバーグ博士との交流は、多くの出会い同様、フェイスブックで始まりました。2013年、ナルシスクリスチナの著書「The Wolf's Tooth(オオカミの歯)」を読み、「あなたの本を読みました。あなたと友達になりたいのです。栄養カスケードについて教えてもらえますか？」とクリスチナにフェイスブックを通して友達申請とメッセージを送りました。クリスチナは本の中で食物連鎖内の生物種同士の関係を取り上げていました。“栄養カスケード”とは、生態系を構成する生物が捕食・被食関係を通して段階的に効果を及ぼす経路を表す用語で、高次捕食者から餌生物、さらにその餌となる植物へと影響が波及することから栄養カスケード(栄養の滝)と呼ばれています。クリスチナは、人々の尊敬を集めるカイナイ族の長老、ナルシスからのメッセージに驚き、すぐに彼の友達申請を受け入れました。

「全てのことがらが重なって、一度に起きるといふ特別な時期がありますよね。まさにこれがそういう時期だったのです」と、クリスチナは語りました。彼女はアースウォッチの上級研究者で、探査プロジェクト“野火、オオカミ、バイソンをカナディアンロッキーに取り戻す”の主任研究員も務めています。

数ヶ月後、クリスチナはナルシスと彼の妻(アルビン・マウンテンホース)をアルバータ

州にある彼女の調査地、ウォータートンレイクス国立公園に招待し、彼女の調査方法や成果をナルシスに見せました。生物多様性のホットスポットであるこの地域で、クリスチナと彼女の調査チームは、オオカミ、エルク、野火、草原、及びアスペン(ポプラの1種)の相関関係について調査しています。彼らは、かつてオオカミが生息していた地域や当時のエルクの頭数、アスペンが草地に群生していた場所、そして、生態系を維持するために自分たちが起こした野火について語りました。クリスチナがナルシスとアルビンに、「ここで何が起きているのでしょうか?」と尋ねると、ナルシスは「そうですね。何かがありません」と答えました。

かつては数千万頭もの野生のバイソン(バッファローと呼ばれる事もある)がウォータートン周辺を含む北米全域に生息していました。しかし、1800年代半ばにアメリカに入植したヨーロッパ系の人々がバイソンを虐殺し、その風景を事実上‘野性味の無いもの’にしてしまったのです。今では、この国立公園には野生のバイソンは1頭も残っていません。

「私達の歌や儀式はバッファローに帰って来いと呼び掛けている。バッファローを連れ戻せ! この地に彼らを連れ戻せ。こんな柵は取り払おう。私達には彼らが必要だ。おそらく、彼らが私達を必要としている以上に、私達が彼らを必要としている」— ナルキッセ・ブラッド作アメリカバイソンの物語: 嵐に立ち向かうより

ウォータートン研究所で過ごした夜、クリスチナはナルシスとアルビンに夕食をごちそうしました。彼女と調査チームメンバーは、ピザ生地を伸ばし、クリスチナが狩ったエルクの肉を使ったミートパイをトッピングにしました。何時間もの間、彼らは、オオカミと遭遇した体験談、エルクの狩り、自然界における個々の要素同士の関係を理解する自然科学の重要性について話し合いました。かつて、この生態系で野生のバイソンが果たしていた役割についても話しました。

その夜の終わりに、ナルシスはクリスチナをハグし、夕食への感謝と別れを告げました。その場を立ち去る前に彼は振り返り、「あなたが今やっている調査を私達の土地でもやって欲しいのですが……」とクリスチナに告げました。

ブラッド族限定の森

50年以上もの間、ブラッド族限定の森林として知られているアルバータ州のブラックフット族の土地は、部族メンバー以外の人間の侵入を拒んできました。長期に渡り、外部の者は、部族にとって神聖な森と青々と茂ったエルクの草原を、違法な樹木の伐採や繁殖力の強い外来種の草を植えて破壊してきました。ナルシスは短い別れの言葉の中で、1960年以來、初めて部族以外の人間に、その土地での科学的データ収集に許可を与えたのです。その結果、現在クリスチナは自分の調査対象を非常に重要な生態系にまで拡大することが可能になり、カイナイ族や部族のリーダー達（ルロイ・リトルベア、クロ・アン・ウェルズ、マイク・ブルーズド・ヘッド、カンジー・フォックス、エリオット・フォックスなど）の協力を得て、調査を続けています。

今日、ウォータートンレイクス国立公園は、最も野生の面影を残し、人間の影響を受けていない北米の自然景観に数えられています。この多様性に富む生態系の中で、クリスチナの調査チーム（デイビッド・ヒップスやカーティス・エドソンなどの研究者、現場で調査に携わる技術者、公園のレンジャー、アースウォッチボランティアなど）は、オオカミ、エルク、野火のような自然界で大きな影響力を持つ要素の間に、どのような関係があるのかを解明しようと力を合わせて取り組んできました。現在、調査チームは、この自然景観にバイソンを再導入する計画の実現に向けて、この繊細な生態系を維持する上でバイソンが果たしうる役割を検証しています。カイナイ・ファーストネーションと協力しながらブラッド族限定の森の奥まで調査地域を広げることで、本調査はウォータートンレイクス国立公園の管理者や保護団体だけでなく、部族の土地を守り続けるカイナイ族のリーダー達とも調査結果を共有することができるようになりました。

「この協力関係は、今後100年続くでしょう。私は、たまたま、ちょうど良い時に、ちょうど良い場所に居合わせただけです。そういう運命だったのです。そして、アースウォッチも現在の素晴らしい状況の実現に不可欠な要素なのです」と、クリスチナは語りました。

クリスチナにとって、ウォータートンレイクスでの夕食がナルシスとの最後の出会いになりました。2015年、彼は、カナダのサスカチュワン州で交通事故にあい、命を落としました。しかし、彼のレガシーはまだ生きています。「部族の人々は彼がまだ生きていたかのように、今でも彼の話をします。彼らはナルシスの死が自分達の心を1つに

したと言いました。それは彼の残した遺産(レガシー)なのです」と、クリスチナは語り
ました

非野生化

かつては数千万頭ものバイソンが北米全域を歩き回り、大群をなして大草原を轟かせ、通った跡に砂煙を残していきました。しかし、ヨーロッパからアメリカに入植した人々が西へ向かうにつれ、バイソンを食糧、衣服、住居、道具、その他無数の用具の素材として利用し、さらにバイソンに霊的繋がりも抱いていたアメリカ先住民部族を支配下に置くため、アメリカ合衆国陸軍はバイソン殲滅作戦を展開しました。バイソンの生息地は農地に変えられ、この動物種は絶滅寸前まで狩り尽くされました。1880年代末期には、かつてこの地で優位を誇っていた、北米の象徴とも言える種は 1000 頭まで減少しました。

「バッファローの絶滅の主な要因、そして、あらゆる事象に影響を及ぼしたのは、動物が生息する土地全域を破壊する暴力的要素を伴った文明の到来だった」— ウィリアム・T・ホーナデイ著, 「アメリカバイソンの撲滅」より

1900 年代初頭、動物学者であり、剥製師でもあったウィリアム・T・ホーナデイ率いる自然保護主義者のグループは、セオドア・ルーズベルトとブーンアンドクロケットクラブの支援を受け、バイソンを絶滅の危機から救う運動を開始しました。北米で最も古い野生生物と生息地の保護団体であるブーンアンドクロケットクラブは、オオカミ、カリブー、シロイワヤギなど多くの保護を必要とする生物種の中で、特にバイソンの絶滅を食い止める活動に取り組み、成果を上げました。自然保護活動家達は生き残っていた少数のバイソンをイエローストーン国立公園とカナダのグレートスレイブ湖の保護区に確実に移動するのに協力し、残りのバイソンは私有地や動物園で飼育されることになりました。

年々、保護下のバイソンの頭数が増えるにつれ、公園管理官は狩猟の恐れが無い公園内に限定してバイソンを飼い続けるという難題に直面しました。「バイソンは生まれつき広い土地を動き回る動物なのです。イエローストーン国立公園のような場所は、バイソンにとって郵便切手ほどの大きさしかありません。彼らは、960 キロもの大移動をします。これは、彼らの本能であり、彼らの DNA にプログラムされているのです」と、

クリスチナは語っています。

自然保護活動家達は、生き残ったバッファローを保護し、野生に帰すことを目指すバッファロー・フィールド・キャンペーンの推進者と共に、イエローストーン国立公園の外側で待機し、境界線に近づくバイソンを銃声で保護区内に追い返しました。彼らは危険を顧みず、バイソンと銃弾との間に入ったこともありました。

バイソンの群れは国立公園の中なら保護されていますが、移動できなければバイソンは生態学的役割を果たすことはできません。「重要な草食動物種としてバイソンが担っている生態学的役割は彼らの移動能力と関係があります。バイソンは短期間1ヶ所に留まり、自らの排泄物で生態系を栄養豊かにして、去って行きます。その後、次の草食動物の群れがやって来て、新たに育った美味しい草を食べます。こうして誰もが幸福になるというわけです」とクリスチナは語りました。また、バイソンはアスピンの若木を踏み倒し、樹木が草地に侵入するのを防ぐ役割も果たしています。

ウォータートン国立公園に話を戻すと、この失われたバイソンによる生態系サービスの代わりに、公園管理官は育ち過ぎたアスピンを計画的に焼き払い、草地を維持してきました。この問題の解決には、放し飼いのバイソンの方が適しています。野火は、先住民が狩りやバイソンの生息環境の改善のために利用されてきました。過去1万年もの間、野火は、この生態系の不可欠な要素であり、生態系を維持する方法として残っていくでしょうが、バイソンの存在によって必要とされる頻度は減っていくでしょう。

それでは、バイソンを元々の生息地に戻すにはどうしたらよいのでしょうか？

バッファロー協定

2014年、ブラックフット連合のカイナイ族の著名な長老であり、ハーバード大学ネイティブアメリカンプログラムの前理事長を務めていたルロイ・リトルベアは、北部部族バッファロー協定として知られる歴史的協定の草案を作成しました。この協定は野生のバイソンを部族の土地へ戻し、彼らが生態学的、文化的、宗教的な役割を果たすことを目指していました。2014年9月、モンタナ州のブラウニングにあるブラックフット族の領有地において、野生動物保護協会の支援を受けた8つのアメリカ先住民部族とカナダの先住民が協定に署名しました。これは、過去150年間にこれらの部族間で交

わされた、初めての平和協定でした。今では、20 もの部族がこの協定に署名しています。

「バイソンは先住民の世界そのものでした。彼らの宗教的信念、生活、文化、全てがバイソンを中心にして回っていました。だから、バイソンの絶滅によって彼らは大きな傷を負いました。現在は大掛かりな治療が行われています。それと同時に、私たちは、自分たちが生態系に与えた傷を治療する努力をしなければ、気候変動に効果的に対処することなどできないということを理解しました。バイソンは失われたピース、この世界に不可欠な構成要素なのです」と、クリスチナは語りました。

2015 年 2 月、カナダ国立公園協会はバンフ国立公園に放し飼いのバイソンを再導入する計画を発表し、丁度 1 ヶ月前、2017 年 2 月に計画は実施されました。

蹄を地上に

カナダ、バンフ国立公園のパンサーバレーにある柵で囲まれた牧草地に、ヘリコプターから長さ 3 メートルの輸送コンテナが 1 つずつ釣り降ろされました。輸送スタッフが着地したコンテナをしっかりと固定し、扉を開けました。遺伝的に純粋な“子孫の群れ”から選ばれた 16 頭の若いバイソン、6 頭の雄と 10 頭の妊娠中の雌は、エルクアイランド国立公園で野生に戻る道のりの最初の一步を踏み出し、雪で覆われた牧草地をギャロップで駆け抜けて行きました。

この最初の野生への解放は、ウォータートン国立公園などアメリカとカナダの元々の生息地にバイソンを再導入しようという、より大きな取り組みの一環でした。80 頭を超える飼育下にある若いバイソンの群れが、モンタナ州北西部にある Badger- Two Medicine 地域に解き放たれるのを待ち望んでいます。バイソンを自然に帰す計画は、野生動物保護協会の上級生態学者、キース・アウンによって進められ、*Iinnii* 計画 (iinnii はブラックフット族の言葉でバイソンという意味)と呼ばれています。

バイソンを元の生息地に帰すための調査に協力してください

アースウォッチの探査プロジェクト、“野火、オオカミ、バイソンをカナディアンロッキーに取り戻す”に参加してクリスチナと彼女の野外調査チームに加わり、現在、最も重

要な保護活動の1つとして讃えられている調査に協力してください。

ブラックフット・ファーストネイションの人々とともに、ウォータートンレイクス国立公園と周辺地域で国の保護および管理政策の立案に必要なデータ収集活動をしてください。これはバイソンを野生に帰すための予備調査です。研究者、自然保護主義者、政策立案者、先住民のチームに加わり、バイソンを故郷に帰すのを手伝ってください。